

ことば  
**文学とアート**  
意識を追いこす指先

10

October  
2023 NO.175

月刊 **アートコレクターズ**

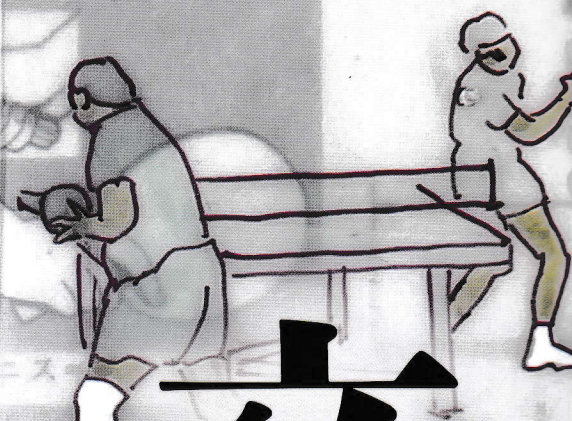
*The Pleasure To See.  
The Pleasure To Buy.*

**Art**

**Collectors'**

意識を追いこす指先

**文**  
ことば  
**学**  
**アート**



対談

**吉増剛造 × 建畠 哲**

インタビュー

寄稿

**柴田元幸 若松英輔・千葉雅也**



## 鈴木ヒラク

先人との対話を糧に

タイトロープを歩き続ける

## ドローイングの可能性

——鈴木さんは日本におけるドローイング概念の拡張を模索し続けています。

欧米ではドローイングの研究が進んでいて、例えばアメリカではザ・ドローイング・センターという専門の機関があり、ドローイングの再定義と再評価を行っています。今まで絵画のための下絵としてしか見られていなかったドローイングが独立したアートのジャンルとして確立されて、さらにそこから新しい表現が生まれていくのを目の当たりにして、日本でそういったドローイング史の研究や定義付けが抜け落ちている事実を痛感しました。日本では書や漫画

ドローイングを軸に、「書く」と「描く」の間を探究する鈴木ヒラク。その領域は平面作品にとどまらず、インスタレーションやパフォーマンスに拡大し、9月20日には初の著作となる『DRAWING ドローイング 点・線・面からチューブへ』を刊行。今回は、あくまでもドローイングにこだわり続ける表現活動について話を伺った。

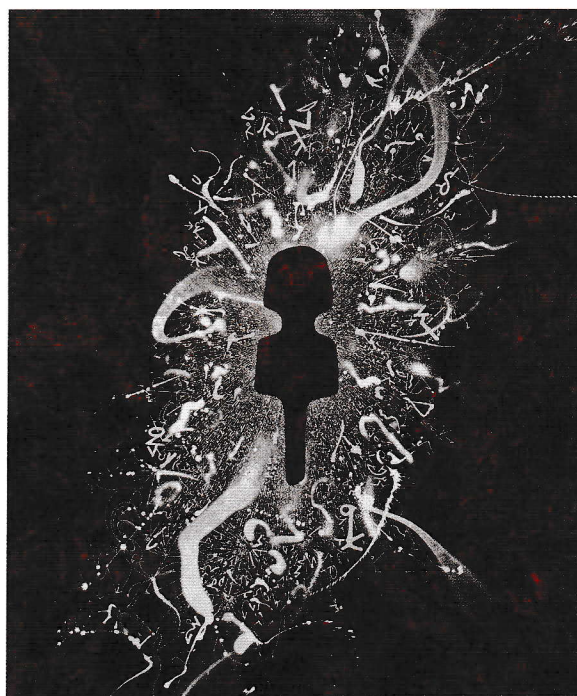
など線に対する愛着が強く残っているのにもかかわらず、それによって生まれた表現をドローイングとして解釈し、論じることがなされています。今回ドローイング論を執筆したのもその想いが前提にあります。また娘が生まれて思い出したのですが、子供がドローイングをする時、「描く」と「書く」が分かれていないんですね。娘は、引つ掻いたりすることでも生まれる線にその都度驚いて興奮しています。その光景に最初の人類を見た気がしたんです。写真家ブラッサイは人間の子供時代を理解することが人類の古代の理解につながるっていましたが、彼が撮影したパリの子供たちの落書きを見ると本当に洞窟壁画のように見えます。

洞窟壁画といえは動物の絵が有名ですが、同時に文字的な記号も数多く刻まれています。それは日本のフゴッペ洞窟や手宮洞窟、アポリジニやアフリカの洞窟壁画でも共通していて、全世界的にみると人間は元々絵と言葉を分けていなかった。だからこそドローイングというのは絵画と言語の間を行ったり来たりできる表現ともいえます。

西洋ではイタリア語で素描を意味するデイズーニョこそが、事物に輪郭線を与え世界を規定できるとルネッサンス期に盛んに主張され、その考えが英語に翻訳されてドローイングと呼ばれました。僕はそこからさらに発展して、漢字文化圏に特有の書をはじめとする「書く」と「描く」の間に於ける実践や、古代から人類が行ってきた豊かな表現を西洋のドローイング史に接続させることでドローイングの可能性が広がると考えています。

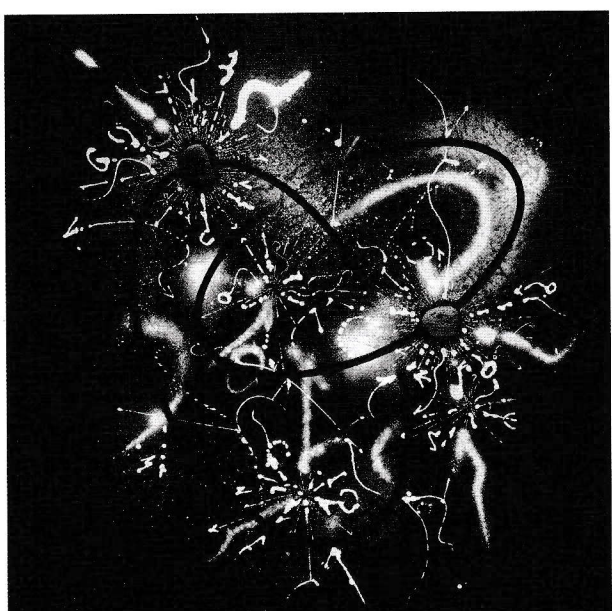
——ドローイングの大きな特徴として即興性がありますが、そこは意識されていますか。

パフォーマンスでも制作でも等しく即興を意識しています。それは発見の連続を積み重ねていくということです。僕の場合は音楽家とセッションする機会が多いので、即興性はずいぶん鍛えられました。特にフリージャズのようなとらわれない心で線を見つけ出したい。例えばオーネット・コールマンのサックスには迷いが無い。そして一つの音が次の音



「Interexcavation #13」2019年 シルバーインク、土、アクリル、顔料、キャンバス 各H194×W162×D3cm 個人蔵（群馬県立近代美術館寄託）  
© Hiraku Suzuki Studio





を導き出す過程に必然性がある。実はタイトロップの上を渡るように演奏しているのかもしれないのですが、そういう危うさを全く感じさせません。それはきつとコールマンが目の前の不思議なものに集中し続けていたからだと思います。今までこうしてきたから次はこうしなければならぬと頭で考えてしまうと彼のような必然性は生まれなかったように思います。

——鈴木さんは音楽家の他に詩人の吉増剛造をはじめ様々なジャンルの方々ともコラボレーションをされています。

吉増さんは僕にとって師匠のような存在で、手だけではなく口からもドローイングを吐き出している方です。2016年の山形ビエンナーレと17年の札幌国際芸術祭でセッションさせていただいたのですが、ちょうどその頃は吉増さんがドリッピンを始めた時で、ご自身の制作に変化があった時期のように思います。実はそれまで自分はドリッピンに抵抗がありました。実際はコントロールが効くにもかかわらず偶然性を装うことにあざとさを感じていたからです。けれど吉増さんがドリッピンをしていた時にポツリと「これはかいているんだよなあ」と呟いていたのが引かかって、その後あの時の「かいている」というのは絵を描くほうか文字を書く方か聞いて

みたんですよ。すると吉増さんは「もちろん文字を書く方だ」とおっしゃっていて、その時にドリッピンによって空中に発生させた線にも書き言葉としての筆跡が宿るのだと教えられました。そして後の対談で吉増さんが当時について「筆致ってものが表面から離陸しちゃってるよね」とおっしゃった時には、書くところの根源から空間へと線を拡張させる最前線のアーティストなのだと改めて感銘を受けました。

### 臆することなく進み続ける

——『GENGA』(河出書房新社刊)を発表された際、既存の言葉では言い尽くせないことが多すぎるとおっしゃっていました。どのようなところに言語の限界性を感じていたのですか。

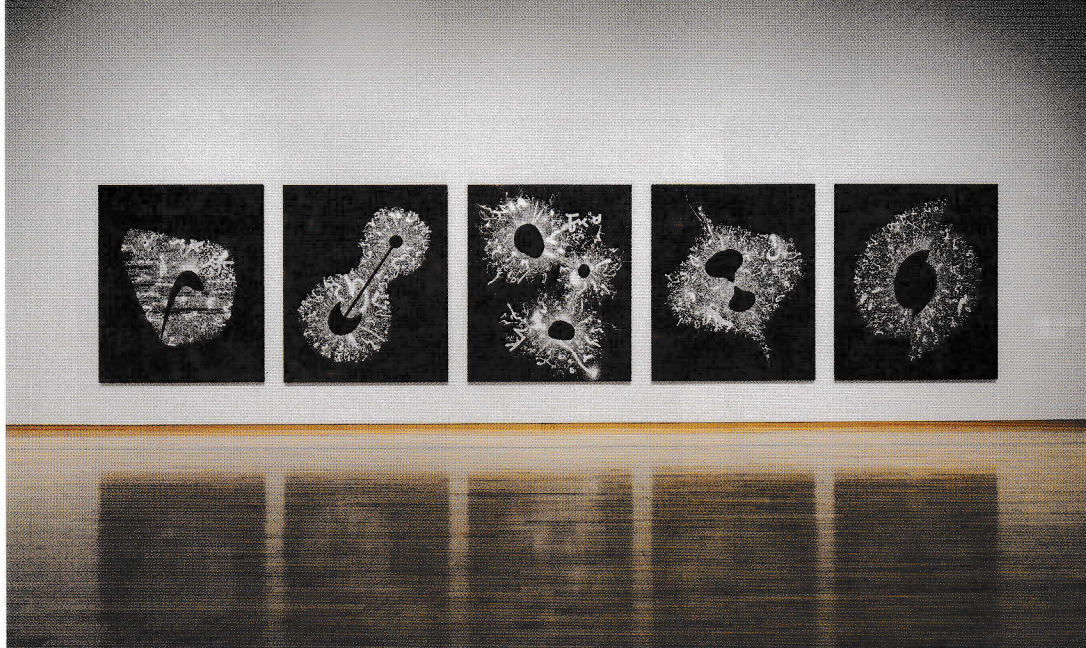
例えば好きすぎて言葉にならないとか、感覚を言葉に翻訳するのは限界があります。それと対照的なのが言葉から感覚を掴もうとする詩であり、そこには言語の新たな可能性が開かれています。新たな言語を獲得するというのは実験の連続ですが、ただ闇雲に進み続けているわけではありません。ウィリアム・バロウズとブライオン・ガイシンのカットアップ技法をはじめ、そういう試みは無数にあります。日本でも例えば比田井南谷は純粹な線としての書を志

向したと言われますが、それによって新たな言語構造を示唆してきました。そういった実験の先駆者が残してくれた滑走路の上を走って未知へと飛び立つイメージで制作しています。そのような先駆者との対話が制作の拠り所になりますし、洞窟壁画を描いた人や、川の流れなどの自然現象も僕にとっては師匠であり仲間でもあります。

——今回刊行される『DRAWING ドローイング』も実験の一つなのではないですか。

そうですね。本書は言葉でドローイングをするように書き上げたこともあり、ドローイング論であると同時に一つの作品だと思っています。実は今回本を出すきっかけになったのは友人の坂口恭平でした。毎日彼が自作の絵をメールで送ってくるのですが、それに対してコメントをしていたら、そのコメントをもとに本を作ろうって言うてきたんですね。彼もまた臆することなく進み続けている人なので、そのような提案をしてくれたのかもしれない。執筆作業は自分にとって発掘作業のようでもあります。書くことで思い出された古い記憶が人類の根源的な記憶とリンクして、最も内側にある感覚に触れたような気持ちになり涙が出てくることもあります。この感動はドローイングで湧きあがる感動と同じものですが、ドローイングしながら涙





(右から)「Interexcavation #01, #02, #06, #05, #21」2019年 シルバーインク、土、アクリル、顔料、キャンバス 各H194×W162×D3cm  
東京都現代美術館蔵「MOTコレクション 光みつる庭／途切れないささやき」(東京都現代美術館) 展示風景 2022年  
Photo by Masaru Yanagiba © Hiraku Suzuki Studio

を流すことはありません。文字の方が人間的だからこそ感情に訴えかけてきたのかもしれませんが、  
普段は人間ではなくむしろ風や木、鳥ひいては宇宙人など人間以外に向けて作品を制作しているのですが、

本に関しては言語を用いる以上対象は人間に限定されますし、人と人が結びつくと、必然的に感情が生まれます。自然や宇宙は人間の感情を超えた透き通った世界です。僕は子供の頃の記憶や娘をはじめとする人との出会いを通して芽生えた人間的な感情が、宇宙のような透き通った世界を経由しつつ相互に跳ね返ってくるようにしたい。日本の詩人だとまど・みちおさんはそれをやっていましたと思います。あの独特な静けさは宇宙を経由した言葉をこちらに投げかけているような気がします。当たり前のことを本当にそのまま書いているのですが、嬉しいや悲しいなどの感情からかけ離れた世界を感じますね。

——鈴木さんは東京藝術大学大学院で教育にも携わっています。

教えるというよりも、世界中から集まった作家の卵とドロ잉セッションをしている気持ちで臨んでいます。今の美術教育やアートの世界は完成形を作ることに固執して、過程よりも結果が重視されています。だから逆算的に作品を作る若い作家が本場に多いです。視覚情報が溢れる現代社会に流されないために、立ち位置を確立しようとする戦略が最優先になってしまっているのかもしれない。でもその戦略は単なるトレードマーク作りに過ぎないですし、そこから生まれるものはバリエーシ

ョンでしかない。逆算じゃなく、知らない土地を散歩するような方法で制作させるとみんな面白いものを見せてくれます。

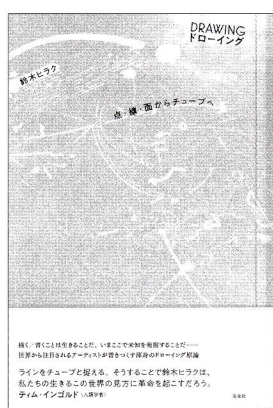
あと最近は逆算することをスタイルって言うてしまう傾向があります。けれども本来スタイルっていうのは先の尖ったものという意味で、自分でコントロールできないものに先端で触れることに意味があるんです。

だからスタイルを生み出すには絶えず複数の触手で未知のものに触れて変化し続けなければならぬんです。例えばジョアン・ミロはどんどん変化しています。より純粋な表現を目指した先の必然としてそれを受け入れている。そこには一切の迷いがありません。進んだ道で立ち止まって考えてしまうとまず失敗します。

驚きと感動を持って進み続けるときつとうまくなります。

やっぱり自分が書いた線にびつくりすることはすごく楽しいんです。

「DRAWING ドロ잉」点・線・面からチューブへ  
2023年9月20日発行  
著者：鈴木ヒラク  
発行：左右社  
価格：2400円＋税



むしろ僕は自分が書いた線に驚きたくてずっとやっているのかもしれない。そのためにはそういう目の前の不思議に集中できる状況をまずセツトすることが重要で、自分にとってそれがシルバーインクであったり石を使ったりすることでした。入り口をセツトすると、あとはもう歩いていけば見たことない景色が見えてきますから。

※1 オーネット・コールマン(1930-2015年) アメリカ合衆国生まれのジャズ・サクソフォーン奏者。フリージャズの先駆者としても知られる。

※2 ウィリアム・S・バロウズ(1914-1997年) アメリカ合衆国生まれの小説家。1950年代のビート・ジェネレーションを代表する作家の一人。

※3 ブライアン・ガイシン(1916-1986年) イギリス生まれのフランス人画家、著述家、音楽詩人。バフォーマンス・アーティスト。親友の小説家ウィリアム・S・バロウズとともに、カットアップの手法を用いたことで知られる。



すずき・ひらく 1978年宮城県生まれ。2001年武蔵野美術大学造形学部映像学科卒業。08年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。

Information  
鈴木ヒラク「今日の発掘」  
会期 9月16日(土)～12月19日(火)  
会場 群馬県立近代美術館  
問い合わせ 027(346)5560